

奈良 ESD コンソーシアム 第3回彦根市 ESD 連続セミナー概要報告

奈良教育大学 次世代教員養成センター

准教授 中澤 静男

開催日時 11月12日(木) 18時30分～20時30分
会場 彦根市民会館第3会議室
参加者 学校教育課：藤居英樹、大西康夫、吉田克、東野了賢、永井慎太郎、井上崇子
高橋乃生子、白髭英之
教育研究所：吉田則夫、竹内圭子
保健体育課：小林豊司
生涯学習課：川添義夫、岩堂伸行
滋賀大研修派遣(城北小学校)：田中岳
奈良教育大学：吉川俊美、中澤静男 16名

1. ESDの目標について(「ESD実施計画」より)

ESDの目標は、すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現することです。

(1) 持続可能な開発のために求められる原則について

① 持続可能な開発の定義(ブルントラント委員会)より

- ・「持続可能な開発とは、将来の世代がそのニーズを満たす能力を損なうことなく、現世代のニーズを満たす開発」：世代間の公正と世代内の公正
- ・開発は、人間のニーズを満足させ、生活の質を向上させるために不可欠である一方、それは現在および将来のニーズを満足させる自然資源の能力を損なうことがないように実施すべきであると考えられるものである。(「DESD国際実施計画」)
- ・持続可能な開発とは「人間を支える生態系が有する能力の範囲内で営みながら、人間の生活の質を向上させること」(国際自然保護委員会、国連環境計画及び世界自然保護基金)

開発とは、人々の生活の質の向上の上でなくてはならないものであるが、生態系の能力の範囲内で行わなければならない。

(2) 生態系の有する能力の範囲について

① ハーマン・デイリーの3条件

A：再生可能な資源を持続可能な形で利用するには、その資源が再生するペースを越えてはならない。

B：再生不可能な資源を持続可能な形で利



用するには、その再生不可能な資源に代わりうる、再生可能な資源が開発されるペースを上回ってはならない。

C：汚染物質を持続可能な形で排出するには、自然や環境がそうした汚染物質を循環し、吸収し、無害化できるペースを越えてはならない。

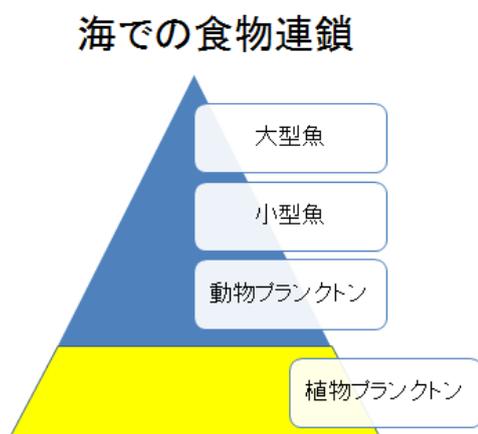
【E S D環境教育の視座】

Aから

再生可能な資源の利用とは：農業、漁業、林業、及びその生産物の加工品

持続可能な農業→世界農業遺産 その持続可能な仕組みをモデル化し、地域の農業と比較することで、地域の農業の課題や長所を浮き彫りにする。その上で、地域の未来の農業の姿を構想する。

漁業 獲る漁業だけでなく、漁業を成り立たせるものを豊かにする取組に視野を広げる：海の恵み→川の恵み→森の恵み：森は海の恋人運動→河川の環境保護→川ゴミ・海ゴミ：流域環境



海の恵みは、川の恵みが流れ込んだもの。川の恵みは森の恵み。豊かな恵みの海を育てるためには、森の環境保護が必要。：森は海の恋人運動

海ゴミは、川ゴミが流れてきたもの。川ゴミは人間が廃棄したもの。

流域で自然環境を守り育てていく発想、行動。

林業 紙製品、マーガリン・洗剤・スナック菓子・バーベキュー炭などの原料の輸入元の状況：熱帯雨林の破壊、一方で日本の林業の状況

プランテーション農業による、熱帯雨林の破壊。それによる生物多様性の減少とCO₂吸収量の減少（木材チップ（紙の原料）の輸出のための熱帯雨林の破壊（オーストラリア・タスマニア）、地球にやさしいパームオイル生産のための熱帯雨林の破壊（インドネシア、マレーシア）、エビ養殖場を造成するためのマングローブの破壊（タイ、フィリピン、インドネシア、ベトナム）エビは日本・中国に輸出、マングローブはバーベキュー用の炭として日本に輸出）

レインフォレスト・アライアンス認証（環境省）

違法伐採や商業伐採、農地への転用などにより森林が急速に減少し、生物多様性や気候変動に悪影響を及ぼしている状況を受け、2001年にレインフォレスト・アライアンス（RA）は、市場メカニズムを利用して、森林伐採や環境破壊の要因となる木材生産、農地拡大、牧場経営等に歯止めをかける方法として、認証制度を採用しました。

Bから

石油・石炭・天然ガス製品の利用：家電製品・ガソリン・プラスチック製品の利用
そのエネルギー資源の利用は、必要不可欠なものであるかどうかを問い直し、改善策を考える。
環境指標の活用：フードマイレージ、エコレール

Cから：エコロジカル・フットプリント

【ESD環境教育の視点】

○ESDの主な特徴

環境教育は、人類の自然環境との関係や自然環境を保全しその資源を守る方法について焦点を当てている。ESDは、環境教育を包含し、環境教育を公平性、貧困、民主主義、生活の質といった社会・文化的要素と社会・政治的課題の文脈において幅を広げたものである。(国際実施計画最終案)



○児童生徒の日常生活とのつながりを明確にした授業を考える

- ・ライフスタイル
- ・消費行動

○それによって、目指す児童生徒の行動の変革を想定することができる

(3) 持続可能な開発の中核的な分野

①持続可能な開発の三本柱

社会、環境、経済、(社会という見出しの下に政治的な側面が包含されている)

社会：変化し進歩する社会的な組織とその役割の理解、それに加えて意見の表明、政府の選択、コンセンサスの形成及び相違点の解決のための機会を与える民主的で自由に参加できるシステムについての理解

環境：環境への関心を社会経済的な政策決定の中に織り込むことによる、資源に対する認識、自然環境の脆弱性とそれに対する人間活動や意思決定の影響についての認識

経済：環境と社会的な公平性に対する関心から、個人と社会レベルの消費について評価することによる、経済成長の限界と可能性及びその社会と環境への影響についての敏感性

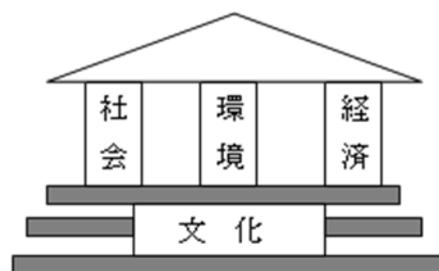


図1 ESDの3本柱とそれを支える文化
出典：日本ホリスティック協会編 2008.5

②文化について

持続可能な開発のこれらの三分野が互いに関連する基盤が、文化という要素を通して提供される。文化は、生存や人との関係、振る舞い、信仰及び活動の方法であり、それは置かれている状況や歴史、伝統によって異なり、またその中で人々が生活を送っているものである。

次の事項の重要性を強調する

- ・多様であることの認識：世界の自然的、社会文化的な状況が多様であることによる人間の経験が生み出すものの豊かさ
- ・違うことへの尊敬と寛大さを育むこと：違うものとの接触が自らを豊かにし、挑戦と刺激を呼び起こす
- ・オープンな議論と対話が継続するよう努めることに価値を認めること
- ・個人の生活や組織の活動において、持続可能な開発を支える尊重と品位という価値観をモデル化する。
- ・持続可能な開発のすべての局面において人的能力を高める
- ・動植物や持続的な農業生産、水の使用方法など地方の土着の知識を活用する
- ・辺鄙な地域からの過大な人口流出の防止策などを含め、持続性を構築するための実践活動や伝統への支援を育む
- ・意識的なものか不注意によるものかに拘わらず、開発という名の下に自然や社会、世界を無視したり破壊したりすることなく、文化的に特別な見方により、自然、社会、世界を認識し、活動する。
- ・相互のふれあいや文化的な独自性を発揮するための原動力として、地方の言語の利用や発展を含むローカルな通信方法を採用する。

検討していただいた単元計画

①辺鄙な地域からの過大な人口流出の防止策などを含め、持続性を構築するための実践活動や伝統への支援を育む

田舎のよさとは何かをテーマに調査活動（保護者・高齢者へのインタビュー）

都会の子どもの考えを聞く

都会の学校と交流して、直接子ども同士で話し合う。ディベートでもよい。

都会でホームステイなどを体験し、都会の暮らしを体感する。

人口流出についての関心を高める

便利という「ものさし」に代わるモノサシを探す

伝統の良さを体感する

②人と人をつなぐ方言を集め、その言葉の持つ意味や背景を調べることで、人の生き方の良さを知る授業

第一次 方言を調べる・探す

第二次 その方言を使う状況を考える
(アクティブ・ラーニング)

第三次 方言を実際に使ってみる
(ローカルな通信)

相手の反応は？場の雰囲気は？

第四次 さらに方言を探す

(保護者、高齢者へのインタビュー)



③辺鄙な地域からの過大な人口流出の防止策などを含め、持続性を構築するための実践活動や伝統への支援を育む

幸せ・豊かさとは何かについて、取り組ませたい。

子ども目線で、幸せや豊かさを、生活場面から収集する。

調査活動での人との出会いを通して、ふるさとを知る。

他市の学校との交流活動を通じて、自分のふるさとを紹介することで、ふるさとへの愛着を育てる。他校生徒、ホストファミリー等へ「幸せ・豊かさ」に関するインタビュー

自分にとって、多くの人にとって「幸せ・豊かさ」とは何かを問い直す。

④動植物や持続的な農業生産、水の使用方法など地方の土着の知識を活用する

・つかむ 土着の知識は、今でも活用できるか

・調べる 動植物の利用方法や農業、水の利用・洪水対策など、どのような土着の知識があるのかを調べる

・くらべる 調べた知識や方法と現在行われている方法を比べ、それぞれの良さを見つける
環境的側面、経済的側面、効率、等

・調べる2 わからないところは専門家等に聞いて、さらに深く調べる

2. ESDで育てたい価値観

①ESDが求めなくてはならない価値観の基礎（「DESD国際実施計画最終案」より）

・世界中のすべての人々の尊厳と人としての権利を尊重し、すべての人々のための社会的・経済的な公平さにコミットすること。（世代内の公正）

・将来世代の人々の権利を尊重し、世代間の責任にコミットすること。（世代間の公正）

・地球のエコシステムの保護と回復を含む多様性に富んだより大きな生命の共同体に対する尊重と思いやり（環境配慮）

・文化的な多様性を尊重し、寛大で非暴力、平和な文化を地方においても地球レベルにおいても作ることにコミットすること。（人権・文化の尊重）

②持続可能な開発の究極の目標

・人々が、人間および市民として尊厳のある方法で権利を行使することができる世の中で、より悩みが少なく、より空腹でなく、より貧乏でないように、平和裏に人々が共存することを達成すること。

・生物圏及び地圏において生物多様性の減少や廃棄物の蓄積をもたらすことがないようにすることにより、自然環境が自ら再生する役割を果たすこと

持続可能な社会の形成者に求められる価値観をまとめると

同じ世代の多様な人々、また将来世代の人々に自己の行動が影響を与えることを意識し、環境に配慮するとともに、互いの人権や文化を尊重することができるという価値観。また、過去の先人の苦労や努力の思いをはせ、感謝するとともに、よりよい社会を実現し、将来世代に伝えようという責任感ある生き方。

3. ESDで育てたい力

◇文部科学省HP

- A持続可能な開発に関する価値観
 (人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等)
- B体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方)
- C代替案の思考力(批判力)
- Dデータや情報の分析能力
- Eコミュニケーション能力

◇国立教育政策研究所

① 批判的に考える力 《批判》	合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に思考・判断する力。
② 未来像を予測して計画を立てる力《未来》	過去や現在に基づき、あるべき未来像(ビジョン)を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、ものごとを計画する力。
③ 多面的、総合的に考える力 《多面》	人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム)を理解し、それらを多面的、総合的に考える力。
④ コミュニケーションを行う力 《伝達》	自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力。
⑤ 他者と協力する力 《協力》	他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度。
⑥ つながりを尊重する態度 《関連》	人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心を持ち、それらを尊重し大切にしようとする態度。
⑦ 進んで参加する態度《参加》	集団や社会における自分の発言や行動に責任を持ち、自分の役割を踏まえた上で、ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度。

4. ESDの学び方・教え方

文科省HP

- 「関心の喚起 → 理解の深化 → 参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること
- 単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること
- 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

ESDのアプローチとアクティブラーニング

アクティブラーニングとは能動学習、学習者主体の学習です。

- ①課題の発見
- ②調査・探求

③調査結果の公表・話し合い

④まとめ・発信・行動化 ①課題の発見→探求の連続

※私は特に重要なことは①課題の発見であると考えています。先生が用意した課題は、予定している学習内容を理解（知識理解）するにはよいですが、子どもは次第に意欲を失いがちです。

「切実感」のある課題を①見出すことができる環境を、②偶然出たものをキャッチする力量をつける。

※E S Dのアプローチの特色がアクティブラーニングに向いている

「答えが教員にもわからない」

一方的に教えるという授業スタイルではなく、子どもと教員が共同で研究する

- ・ 地球的諸課題について知ること
- ・ 自分事として追究する・研究するという姿勢
- ・ 先生やなかまと一緒に取り組むという経験を通した能力育成
- ・ だまってすわっていても何もわからない。何も解決できない。

5. E S Dで育てたい行動力

E S Dは理解だけでなく、行動化まで求めている

- ・ 学習過程の中に「行動化」を位置づけることができるのは、総合的な学習の時間だけ。
- ・ 総合的な学習の時間において、持続可能な社会づくりに関わる課題を取り上げ、問題解決型の学習を展開し、学習過程に行動化を位置づける。

※ 行動の変革を促すもの

「地域を大切に思う心」を養い、次世代の地域の担い手としての当事者意識をもたせることが必須条件。

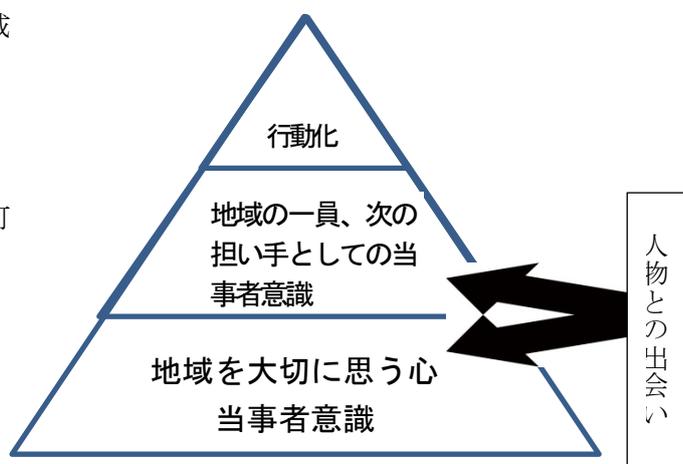
①「地域を大切に思う心」を養うためには、地域の価値、地域のよさを知る必要がある。

その際に、必ず人物との出会いを設定する。

② その上で、子どもにとって身近で切実な課題（地域に根差したもの。地域の教材化）、持続可能な社会づくりに関わる課題を追究することで、行動化が図られる。



- ・ ライフスタイルの変革
- ・ 地域活動への参加・参画
- ・ 持続可能な社会づくりの呼びかけ
- ・ 持続可能な社会づくりの政策提案



【E S Dストラテジー】

6. まとめ

- 地域の文化遺産・産業・自然環境等の教材開発・授業化を行い地域を大切に思う心を育てる。
- 地域の持続可能性にかかわる課題を選択する。
- 地域の課題と他の地方の課題、地球的諸課題をつなげることで、児童生徒の視野を広げる。
- 行動化を促し、行動の振り返りを行い、ブラッシュアップを図る、発信・交流する。

